

川と人をつなぐ伝統漁法つけば



はじめに

川音を聞きながら、香ばしい炭火焼きをいただきます。熱々でふわふわの白身は、塩でも山椒味噌でも美味しい。皆さんも行きましたか？初夏になると河原に建つつけば小屋。そこで提供されるウグイ料理は格別ですね。ウグイはどうやって捕られているのでしょうか。今回は、つけばを探訪します！

そもそも「つけば」とは？

河床の産卵床に産卵のために集まったウグイを投網で捕る「瀬付き漁法」のひとつで

す。ウグイはきれいな砂利を産卵場所を選びます。この性質を利用して、ウグイが好むように作った人工の産卵床と、ウグイを捕獲する仕掛けを川の中に設置する漁がつけばです。産卵場所を指す「種付け場」が語源だと言われています。ウグイはほぼ全国に生息している魚で、瀬付き漁法も全国各所で行われていますが、つけばという呼称と、つけば小屋のような場所を設けて料理を楽しむ文化は、千曲川や犀川水系特有です。また、当

地方ではウグイのことをハヤ（鮠）と呼びます。生殖期には体側に朱色の線が現れることから、アカウオ（赤魚）とも呼んでいます。

つけば漁の発祥時期は不明ですが、江戸時代にはすでに行われていました。ウグイは通年食されており、身近な食材だったようです。河原に小屋を建てて料理を楽しむようになったのは、明治時代以降だと考えられます。特にこの地域は、戸倉上山田温泉の開湯・発展とともに、温泉客が

立ち寄る観光スポットとしても定着してきました。

仕掛けには、マヤ（杵つけば）・アゲカワ・ワリカワ・スリバチの四種類があります。これは、千曲川の地形や水量が地域により異なるためです。マヤはやや深いところ、アゲカワは浅いところ、といった具合です。今回のふるさと探訪では、坂城地区でつけばを営む後藤敏一さん・正一さん父子にご協力いただき、マヤつけばをご紹介します。

仕掛け作り

マヤの仕掛けは、水流を調整する杵と、産卵床となる砂利を設置します。杵は投網を打つための足場にもなります。この杵のことをマヤといい、馬屋とも表記されます。川に設置されると写真1のような姿になります。マヤつけばは水深が一・二m～三mの漁場で行います。

杵作りは、陸上で準備をします。まずは、ヒジリと呼ぶ高さ二mほどの三角錐状の木組みを二つ作ります。木材は松や杉を用い、番線で固定します。底部は番線で編み、金網を張ったような状態にします。さらに側面の横木を縄で編むと、三角錐の下部が籠状になります。川に沈めた後、この籠に石を詰めて安定させ、同時に水流を調整します。これは、聖牛という伝統的な水制技術の応用です。ヒジリという名は聖牛に由来するのでしょうか。杵も同様で、水制・護岸に用いる伝統的な水制工の名です。

続いて、杵の前面に取り付



マヤつけば（写真1）

ける「トバ」を作ります。柳の枝を竹棒で押さえ、生垣のように紐で固定します。その年に手に入る竹棒の長さによって作るトバの数は前後しますが、三枚から四枚は必要になります。葉先を下にして杵の前面に隙間なく設置し、水勢を制御すると共に産卵床となる砂利の山を支えます。このトバの姿は、切れた堤防を修復する際、葉の付いた竹と萱を垣状にして下埋めに用いた「屏風返し」によく似ています。

トバ



つけば漁は、古くからある水防の技術をいくつも応用しているのです。

仕掛け設置

四月二十日ごろ、ヒジリを川の中に設置します。岸から一、二m離し、前面を上流へ向け、やや本流側へ開いた角度にします。二つを材木で固定し、河原石を詰めます。水上には牛の角のようにヒジリの上部のみが見えています。この飛び出た部分は切除し、トバを前面に固定します。続いて、

天面に材木を渡して足場板を敷き、ブルーシートでトバごと覆います。さらに畳を敷いて、投網を打つ足場ができました。この場所を踊り場ともいいます。

産卵床作り

杵の前面に大きめの河原石を入れて土台を作り、その上から砂利を流し入れます。こうすると、水面下には富士山型の産卵床が出来上がります。水流で砂利が少し転がるぐらいの勾配で、常に上から新しい砂利

が供給されるようにしています。杵を岸と離して設置するのも、岸との間に水流を生み、砂利に泥がたまるのを防ぐためです。産卵場所がきれいでないとウグイは来てくれません。砂利の管理が大変重要ですよ。

産卵床ができたらマヤは完成ですが、もう一つ大切な準備があります。杵の下流側の河床を掘り、本流の新鮮な流れが入る生け簀を設けます。そこに、イケタガという箱型の生け簀を浮かべます。イケタガは木製

で、後藤さんの手作りです。この中に、漁の初めに捕れたウグイを入れておくと、下流にいるウグイが仲間の匂いを辿って昇って来ます。このウグイをタネとかオトリと呼びます。タネに誘われて昇ってきたウグイは、ここにきれいな砂利を見つけた、産卵場所を選ぶのです。タネを用いるようになったのは、明治時代からだといわれています。

投網漁

仕掛けを設置してから数日後には、たくさんウグイが集まって来ます。漁は、ウグイが活動する午後二時から深夜にかけて行い、概ね五時間おきに投網を打ちます。後藤さんが使用する投網は通常のものより重く、九・六kgもあります。マヤつければ水深が一m以上あるため、通常の浅瀬用の投網では、錘が軽すぎてウグイを捕獲できません。重い錘は速く沈み、集まったウグイまで届きます。アゲ

ヒジリ



上から見た産卵床



イケタガ



投網を打つ正一さん



カワやワリカワなどの浅瀬で行うつけばより捕獲率は下がりますが、一度に一〇kgもかかることがあります。投網の重量と合わせると二〇kg近くになり、川の中から引き上げるのは重労働です。

ウグイを網から外し、生け簀に浮かべたイケタガへ移します。このウグイがまたタネとなり、下流の仲間をいざないます。つけばは、ウグイだけが集まる、ウグイのための仕掛け

なのです。ウグイを捕獲する一方、良質の産卵床を用意しているのが、生息数の維持にもつながります。後藤さんによると、漁期が終わる頃、下流の川端にたくさん稚魚が見えるそうです。

手入れ（カキタテ）

産卵床の砂利は、時間

手入れ作業の様子



道具を持つ敏一さん



が経つと卵だらけになったり、砂や泥などが付着して、ウグイが好むきれいな産卵場所ではなくなってしまう。つけばは、一度作れば後は投網を打つだけ、という漁ではなく、産卵床の

手入れという重要な作業を要します。

後藤さんは手作りの道具を使用し、四日に一度程度「カキタテ」という手入れを行います。この道具は長い柄の先に匙を付けたもので、船の上から砂利を掻き上げて、汚れを落とします。柄にはロープが付けられ、マヤの上にいる人が持つていて、掻き上げると同時に上に引きます。端から端まで時間をかけて手入れをし、最後に新たな砂利を投入します。

このように、ウグイが好む環境を整え続けるのが、つけば漁です。六月上旬まで、投網漁と手入れが続きます。準備と管理に時間をかけて得られたウグイ。次

に頼る時は、水面下の様子に思いを馳せたいものです。

おわりに

探訪してみて、つけばが様々な知恵や伝統を継承していることを知りました。ウグイの生態や川に関する知識、水制・護岸の土木技術、ウグイを食する文化、川端で川魚料理を囲む風習などです。そしてそれは、川と寄り添い、川と戦い、川の恵みを受けてきたふるさとの歴史でもあります。

川は分断の象徴のように言われることがあります。が、つけばを通して地域の歴史に触れた今、もう一度千曲川を眺めると、かつては別々の郡、別々の村だったこの町を、川が縫い留めているように見えてくるのです。同時に、昔の人の暮らしと、現代の私たちの暮らしも、決して断絶してはおらず、脈々とつながっていることを感じます。

（本間 美麻）

大きなウグイ

